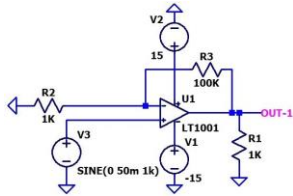


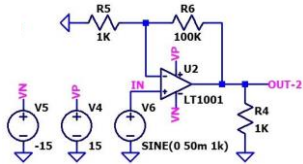
Label で配線をつなぐ

回路図中の配線を、すべてwireで接続すると、回路図中が配線だらけになり、見難くなってしまいます。そこで、回路図の配線を適度に切り離し、ラベルでつなぐことが推奨される。SPICEの文法では、同じノード名（ラベル）同士は接続されているものとみなされる。また、回路図と「ネットリスト」を共存させることもできるので、必要に応じて部品そのものも「SPICE directive」として回路図中に置くこともできる。

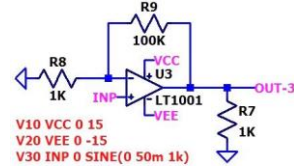
ラベルを付けるにはメニューバーの中の「A」をクリックするか、ホットキー「F4」で、入力窓に文字列を入れる。



回路構成に必要な部品を配置し、すべての配線をwireでつないだもの



プラス・マイナス電源をラベルでつないだもの



SPICE directiveとして・・・

プラス電源 (V10 : プラス側=VCC、

マイナス側=0(GND)、電圧=15V)、

マイナス電源 (V20 : プラス側=VEE、

マイナス側=0 (GND)、電圧=-15V)、

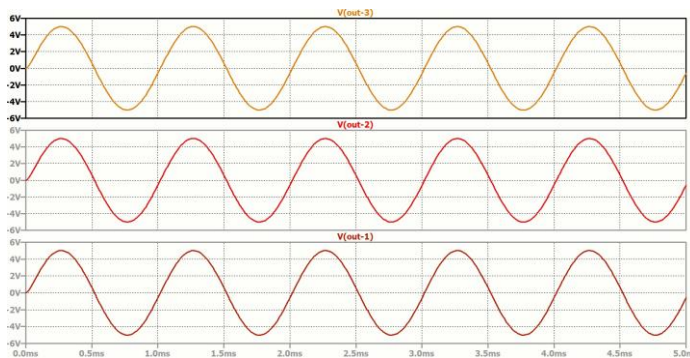
信号源 (V30 : 正弦波 : オフセット=0V、振幅=50mV、

周波数=1kHz)

・・・を回路図中に置いたもの。

信号源までSPICE directiveにすることはあまりないかもしれないが、電源はこのような配置することで、回路図を簡素化するメリットがある。

3つの回路図のシミュレーション結果 (当然同じ結果になっている)



SPICEの基本文法を知っておくことで、回路図入力 of 簡素化や、さまざまなコマンドを活用することができ、シミュレーションの有効活用の幅が広がる。単に回路図をキャプチャーし、「Run」ボタンをクリックするだけでなく、LTspiceのさまざまな機能を活用してほしい。